

学校経営ビジョン		児童生徒一人一人のいのちを尊重し、それぞれの多様な学びにきめ細かく寄り添い、支え、地域とつながる日々の学校生活を通して、児童生徒が共生社会の一員として、自分らしい生き方を創造することを目標に、保護者・地域から信頼される活力ある学校づくりを進める。							
重点目標		1 安全安心な環境を創る体制整備 ・「るびなす安心メール」を活用した児童・生徒等の安否確認及び情報共有 ・防犯訓練、防災・避難訓練等の計画的実施と環境整備、防災教育の強化 ・校内の安全環境の整備及び地域との連携 ・医療的ケア体制の連携強化 2 社会の変化を踏まえた専門性の習得 ・ICT機器等を活用した学習活動の研究及び推進 ・「授業力の向上」を中心に据えた校内研究、校外研修の充実 ・外部専門家との協働による研修の充実 3 個が輝く教育課程の充実 ・個及び協働の学びを支える教育課程の実施と検証 ・キャリア教育の視点をいかした学習活動の展開 ・地域の人材や資源をいかした多様な学習活動の推進 4 地域支援・連携の推進 ・小・中学校、高等学校との交流及び共同学習の推進 ・地域における学校等、各機関が有する特別支援機能強化の支援							
項目		保護者評価	職員評価	具体的方策	学校の自己評価（主な成果・課題等）		学校評議員評価・感想等		今後の改善点
重点目標1	安全安心な環境を創る体制整備	3. 6 (3. 5)	3.2 (3.2)	「るびなす安心メール」を活用した児童・生徒等の安否確認及び情報共有	○ るびなす安心メールは毎月受信確認を実施するなど、確実に情報を提供できるように運用することができた。 ○ 各種災害に対応した避難訓練を、計画的に実施することができた。 ○ 8月の地震の際は、保護者に安否確認、被害や避難等についてメールを発信することができた。 ○ 2学期に緊急災害時を想定した「非常食体験」を実施。保護者の協力を得て調理等を行い、調理時間や進行管理の見通しをもつことができた。 ○ 小学部教室の床の改修、高等部作業棟木部外壁材塗装、図書室・視聴覚室床長替え等、学習環境の改善を進めることができた。今後も、県教育委員会を始め関係各所と連携を図り、児童生徒が安心して過ごせる施設整備等に努めたい。 ○ 定期に「校内医ケア委員会」を実施し、教師と看護師とで現状の情報共有や対応について協議している。また県の医ケア運営協議会等と連携して看護師等への研修も実施している。 ● 福祉避難所指定に向けた施設状況・運用の把握、確認 ● 緊急災害時における校内での食料支給の体制整備（食形態、調理の迅速化）。	3.8 (3.8)	○ 安心メールの活用や避難訓練等、学校が果たす可能な限りの対策を検討し、実施していると感じる。 ○ 更なる徹底した対策の検討を重ねることで、想定事案への意識や準備能力について、学校、保護者、地域社会が相互理解を深めることができると感じる。 ○ コンパクトな学校ならではの、きめ細かな配慮が安全安心な学校づくりに適している。今後、福祉避難所としての役割が地域から求められることから、防災に力を入れている様子が伺える。	□ 安心メールの配信については、これまでどおり進めていく。 □ 福祉避難所指定に向けた、校内備蓄品の点検、施設面の点検を、事務局と連携して進めていく。 □ 次年度以降、新富町の危機管理専門員を学校運営協議会に招聘し、地或自治体との具体的な連携を検討していく。 □ 地或自治体と連携した、実現性の高い避難訓練について、医療的ケア児の対応も含めて検証、実施していく。	
				防犯訓練、防災・避難訓練等の計画的実施と環境整備、防災教育の強化					
				校内の安全環境の整備及び地域との連携					
				医療的ケア体制の連携強化					
重点目標2	社会の変化を踏まえた専門性の習得	3. 7 (3. 6)	3.4 (3.3)	ICT機器等を活用した学習活動の研究及び推進	○ 重度重複障がい児向けの視線入力システムや外部スイッチでおもちゃをコントロールできる電池型 IoT 機器 (MaBee) の活用など、授業で新しいAT 機器の活用を進めてきている。 ○ 書字が困難な児童生徒が文字入力で日記を書いたり、読み上げ機能を使って会話を楽しんだりするなど、授業の中でタブレットを活用する場面が広がりを見せている。 ○ ICT を活用して相互コメントや協働編集を行うことで、協働的な学びの場をより多く提供することができた。 ○ 写真や文書の共有、校内掲示板で写真や動画を使ったコミュニケーションを学ぶなど、授業へのクラウドサービス (Google、Microsoft) の活用が進んだ。 ○ ハローワーク高鍋、たかなべ障がい者就業・生活支援センターと連携し、「一航就労 (障害者雇用) の現状」について研修を実施。西部・児湯地区の雇用の現状や就労に必要なスキル等について理解を深めた。 ● 授業力向上については、学習指導案、年間指導計画の作成を通して今後も研修を実施し、引き続き取り組む。 ● 新しいソフトウェア、アプリに対する教職員のスキルの向上、知識の更新、研修の実施。	3.5 (4.0)	○ 発表会等でのICTを大いに活用した内容に、児童生徒の個々の能力に合わせた活用の促進について、学校の取組に対する意欲を感じた。 ○ 今後将来的な自立に向けた活用の促進について、更に進化していくと期待している。 ○ ICT 活用については、積極的に取り組んでいることが、広く県内でも認知されている。是非新たな取組を期待したいところである。 ○ 研修については、近年、県内全域的に専門性の向上に課題があると感じる。大学からも協力が可能であるので、是非連携し活用されればと思う。	□ 生徒支援部企画の出前講座の活用も進めているが、特に高等部生の祖次用語の使い方について、家庭と連携して指導をする必要がある。 □ 校内、家庭でのスマホ、タブレット使用についてのルール作りを進めていく。 □ 教職員の専門性の向上について、地域人材の活用に加え、大学との連携も進めていく。	
				「授業力の向上」を中心に据えた校内研究、校外研修の充実					
				外部専門家との協働による研修の充実					
重点目標3	個が輝く教育課程の充実	3. 6 (3. 6)	3.3 (3.2)	個及び協働の学びを支える教育課程の実施と検証	○ 教科別の指導において課題別グループによる学習環境を設定することで、各生徒が生き生きと学習に取り組む姿が見られた。 ○ 作業学習において、仲間を意識すること重点目標とすることで、お互いに協力し合う姿が多くなってきた。 ○ 教科指導の場面において、キャリア教育という視点 (仕事の場面設定) を積極的に取り入れることで、今取り組んでいる学習が、将来の就労につながるという意識をもたせることができた。 ○ 事業所説明会は、昨年度の反省を活かし、宮崎市内の事業所や医療的ケア対象の事業所などを新たに追加して実施することができた。 ○ 「ものづくり体験学習」や「記記みらい塾」等、外部事業を活用した出前授業を積極的に取り入れることで、通常の学習とは異なる多様な学習活動を確保することができた。 ○ 社会見学での地域の見学 (高等部1年) やこゆ朝市への参加 (高等部)、ルーピンへの見学 (高作業アグリ部) など、実践的な学習活動を行うことができた。 ○ 卒業生講話においては、就労移行支援事業所等の関係者から、就労の現状や学校で学んでおくことを話していただいたり、福祉の仕事に関する講話では、介護福祉士等から実践的な内容の授業を行っていただいたりした。 ● 児童生徒数の推移を見通した学習形態の実施・検証 ● キャリア教育の視点についての職員研修の必要性。『キャリアパスポート』の作成。	3.5 (4.0)	○ 規模が大きすぎない集団で、きめ細かな教育が行いやすい環境にあると思う。今後県内では高等支援学校が設置され、高等部教育についても変化が出てくると予想される。 ○ 地域の人材や資源を随所で活かした取組が行われている。連携していただいている人材や資源を、児童生徒の成長にどう生かすか、更に発展の余地がある。 ○ 児童生徒への寄り添いは、学校訪問時に感じる温かさが伝わってきている。個々が伸び伸びと楽しく学校生活を送っていることが感じられる。 ○ キャリア教育については、地域社会との連携が重要となるが、積極的に地域に出て行くことで、理解を深めていけると感じる。	□ 今後、高等支援学校が設置された後の、本校高等部の特色を打ち出せる教育課程の策定。 □ 学校運営協議会等を活用した、地域教育資源・人材の開拓の推進。 □ 本校の教育課程と、地域の教育資源や人材とのマッチアップの検証。 □ 本校職員へのキャリア教育に関する研修の設定。 □ キャリアパスポートの作成推進。	
				キャリア教育の視点を活かした学習活動の展開					
				地域の人材や資源を活かした多様な学習活動の推進					
重点目標4	地域支援・連携の推進	3. 5 (3. 4)	3.3 (3.2)	小・中学校、高等学校との交流及び共同学習の推進	○ 今年度も関係校の協力を得て、交流及び共同学習を実施し、連携を進めることができた。 ○ 高鍋高等学校の吹奏楽部によるクリスマス演奏会は児童生徒に好評であると同時に、高校生への障がい理解の啓発にもつながっている。 ○ 小学部はヴィアマテラス宮崎の選手と共に学習活動 (体育、生活単元学習、自立活動) を行った。教師以外の地域人材との活動は、児童がコミュニケーションの力を発揮する場となった。 ○ 高等部1年生について、しらはと工房や高鍋農業高等学校フードビジネス科の生徒と共同学習に取り組み、エコバック作りやサツマイモの定植などを行った。互いに新しい発見や活動の楽しさに気付くことができ、次の活動への意欲を高めることができた。 ● 子供たちのライフキャリアや実態を見通した学習活動への地域人材・資源の活用。 ● 学校や地域の関係機関の双方が、特別支援学校に通う児童生徒の学習活動や支援を通して、組織力の向上を図れるような活動の模索、検討。	3.3 (4.0)	○ 新富町との連携が進んでいて、地域の理解が深まっていると思料する。 ○ センター的機能については、「出前授業」などを通して充実が図られ、コーディネーター以外の教職員も含めた組織的な取組が進められている。 ○ 同世代との交流は、卒業後の生活環境や社会環境をより良いものへと導くことにつながっている。若年層からの連携を継続して行っていくことは非常に意味がある。 ○ 地域連携について、カリキュラムや学習計画が大事だということを理解した上で、もう少し柔軟な対応を期待したい。	□ 新富町をはじめとする児湯地区の自治体との連携は常に意識していく。 □ 地域の他校種との交流及び共同学習については、目的や活動内容を検証しながら継続し、特に「共同学習」の部分について検証、改善を図る。 □ 週末に行われる地域のイベントや活動について、各学部の児童生徒の実態や、家庭への理解、移動手段等を検討し、可能な限り地或活動への参加を進めていく。	
				地域における学校等、各機関が有する特別支援機能強化の支援					